

北見俊郎・喜多村昌次郎・山上徹編著

「港と経済・社会の変貌」

鷹 取 稲 市

(日本大学)

1. はじめに

港が経済・社会のなかでどれだけ重要なはたらきを果たしてきたか、また今後ともすべきかとの問題は、今日のわが国の港のあり方を考える場合、重要なテーマと言える。というのも従来、港の社会科学からの体系的な研究は、必ずしも豊饒な沃地とはいえたなかった。ここに紹介する本書は、このような疑問に対し、港の主要な機能を単に流通機能に限定して考えるものではなく、多様な機能が配置している空間と捉え、社会科学の側面からの総合的、本質的な面をも問題にしたいとするものである。

本書は、北見俊郎教授の「還暦」を祝賀する記念論文集用に編纂されたものであり、原著書は、限定版として刊行されたものであったために、多くの方々より問い合わせ等もあり、このような形にて改訂し、再刊行されたのであるという。各執筆者は、港湾経済学会等でよく活躍されている方々であり、この改訂版には、最後に北見教授の論文も掲載されて編著者となられたようである。本書は、「港と経済・社会の変貌」を共通の問題意識としながら、これを「歴史」、「港勢・物流」、「経営」、「港運・労働」、「臨海部・都市」という視点から港の総合的研究を行った23編の論文から編成されている。

2. 本書の構成と概要

次に本書の構成と各項目の概要について述べてみたい。

「歴 史」

1. カナダの港と社会文化（日本医科大学社会学教室主任・荒木智種）；バンクーバー港の史的発達過程をとりあげ、港と町並み文化について論述している。
2. 人間と港の機能の史的考察（流通経済大学講師・市来清也）；港は、人間社会と複合的に関連しつつ各種の機能を果たしてきたが、歴史的経緯、変革過程を考察し、さらに人間性復活への動向等を展望している。
3. 若松港と石炭輸送（立命館大学教授・土居靖範）；若松港の性格を歴史的に分析し、筑豊の各鉱山の物流ターミナル拠点について考察している。
4. 横浜港の豪華客船（横浜市立大学教授・寺谷武明）；明治末年に日本の造船所で建造され、横浜港を出航して欧米との文化の掛け橋としての役割を果たしたが、歴史の舞台から消えた豪華客船の意義について考察し、日本海運史の側面を論じている。
5. 太平洋戦争期における港湾行政の一元化過程（国際臨海開発研究センター研究員・香川正俊）；わが国が日中戦争から太平洋戦争へと突入していくなかで、港湾行政の変革について、とくに港湾行政の一元化を問題にし、集権的指揮方法に重点が置かれた背景について詳述している。
6. 戦後わが国における港湾研究（大阪市立大学教授・柴田悦子）；戦後からの港湾研究業績を追跡し、港湾史、港湾経済論、自由港・港湾立地論、港湾計画論・開発論、港湾産業論、港湾労働論、情報システム等の研究論文を分類し、紹介している。

「港湾・物流」

7. ハル港の機能と役割（関東学院大学教授・小林照夫）；古典的港としてのハル港が、今日、いかに変貌してきたかとの問題意識を背景に、その機能や役割について論述している。
8. 埠頭利用形態からの工業港の類型（仙台大学教授・永野為紀）；本論文は、英文に記述されており、和文に変えてタイトルを紹介することにしたが、私的埠頭を利用形態から8つに分類し、工業港の類型化を試みた貴重な論文と言える。
9. 1970年代におけるわが国産業の生産拠点の再編成と港湾貨物量の推移（横浜商科大学教授・故 入江成雄）；1970年代のわが国の海外直接投資、国内生産拠点の再編成

を考察し、外貿港湾が、今後いかに変貌するかとの問題を論じている。

10. 港湾の供給メカニズムと需要構造分析（中部女子短期大学助教授・坂井吉良）；港湾整備の供給メカニズム、その需要構造について、経済学的分析により計量化を試みようとしたものである。 11. 海港交通のサービス需要（日本大学教授・山上徹）；交通サービス生産の空間としての港の特性を問題にし、他の交通手段との相違、共通面を分析し、海港交通需要の派生性は、経済発達の段階、産業構造の変化に応じて歴史的に変わり、単なる地理的事情だけでないことを強調している。 12. 物流港湾と旅客港湾（函館大学教授・和泉雄三）；旅客用ターミナルを主たる港湾の機能とする函館港には、青函連絡船の廃止問題があり、まさに港は、物流基地として発達するばかりでなく、「みなと」というイメージがなくなり、コンクリートと機械だけの港となり人間を港から放逐していることが指摘されている。 13. 国土利用の平準化と格差（日本港湾経済学会理事・神代方雅）；北海道を事例として国土利用の平準的増加と海運による物流の効果とをシステムとして考え、格差是正の計画方針を決定する必要性を分析している。

「経営」

14. 港湾経営に関する一考察（東京都職員研修所主幹・山本和夫）；港湾利用システムと供給システムとの間に隔たりがあり、利用者の利用システムと無関係に設備が建設され、その建設コストを回収するという観念があまりみられないと指摘している。そこで港湾の本質は、利用者の立場に立ちシステムを提供するようにしないと港湾競争の時代には、対応できなくなるとしている。 15. 大都市港湾経営の政策軌跡と課題（名古屋港管理組合計画部企画課主幹・木村武彦）；わが国の港の中でも経営体としての条件を満たしている大都市港湾に焦点をあて、高度成長期前後からの港湾経営の軌跡をたどり、港湾経営体の確立への課題について試みられている。

「港運・労働」

16. 技術革新と荷役業の生産性（神奈川総合高等職業訓練校・横浜港湾分校教導・松橋幸一）；港湾における荷役ロボットの問題、コンピューター導入の動向による港湾の生産性が人と機械との関係をどのようにし、将来、い

かなる問題が生じるかが提起されている。 17. 現代港湾運送事業の基礎的問題（財・港湾労働経済研究所研究主幹・富田功）；港湾運送業の公共性との関係より港湾労働福祉の費用負担問題があり、利害当事者間における応分負担の必要性を提起している。 18. 転換期の港運経営と港湾労働（財・港湾労働経済研究所所長・喜多村昌次郎）；国際複合一貫輸送あるいは総合物流業が台頭してきているが、そのような流動的環境下にある港運は、海陸の共通の基礎的機能を提供しており、その安定的維持発展のための労使関係が確立され、今後とも港運の労使関係の安定条件を配慮する必要性を提起している。

「臨海部・都市」

19. 東京湾横断道路計画の経緯と意義（千葉地域科学研究所研究員・渡辺啓文）；東京湾横断構想の史的概況を論じ、千葉県の建設促進の史的展開を試み、湾なり半島のあり方を提起している。 20. 臨海部開発の現段階と地域主義（広島商船高等専門学校助教授・鈴木暁）；高度成長期からの各地の臨海部で用地造成や港湾整備がなされたが、不利用、遊休化という問題が生じている。地方自治体または地域の観点から、臨海部の活性化への解決策を提起している。 21. 港湾都市の伝統と発展の道筋（日本港湾経済学会評議員・千須和富士夫）；横浜が開港以来の宿命を分析し、また「みなとみらい21」の事業の矛盾点を指摘している。 22. 港湾の都市的課題と新しいみなとづくり（日本大学教授・長尾義三）；国土の第3の空間であり、沿岸域開発保全の中核としてのみなと（水都）づくりのあり方を提起されている。 23. 都市と港湾の総合的課題（青山学院大学教授・北見俊郎）；わが国の都市の殆どが形態的に「港湾都市」であっても機能的には、「港湾都市」としての実体をそなえきれてない多くの構造的な問題点をもっていると指摘し、とくに港湾と都市の総合的課題を「港湾政策」での関係で考えるべきであるとし、今後、都市と港の近代化の実現には、問題意識の転換が不可欠と論じている。

以上のように本書は、多くの気鋭な筆者による23編の貴重な論文が5部門に分けられ、編集されている。各時代の経済・社会の要請に応じつつ、港のもつ潜在的機能がいかにクローズ・アップされ、推移発展してきたか、また行くべきか等の提言がみられた。港の全ての領域を網羅した総合的研究は、個人的能力だけでは限界があるであろう。そのような意味でも本書の刊行は、わが国の港の研究に学際的研究が必要であることを提起したことの意義は大きい。

強いて一言指摘するならば、部内の各論文相互が、必ずしも体系化されていなく、相互に関連していない側面がみられ、さらに焦点を絞られ、部門内だけでも体系化することが必要である。確かに、本書の当初の目的は、編者の1人でもある北見俊郎教授の「還暦記念論文集」の改訂版であり、各論文の内容等の不統一な面については致し方ないことかもしれない。

本書は、このように時間的経緯により港の変化、変貌という問題意識から編集され、広範なかつ本質的問題についても考察されている。多方面な分野からなり、単に港湾問題に興味のある方々だけでなく、都市・交通・歴史等に关心のある方々にも是非とも一読をすすめたい。

(時潮社 昭和61年9月発行 404p. 定価 3,300円)